

長崎と天草の縁

天草切支丹館館長 近藤 鉄男

長崎と天草は一衣帯水の仲。長崎へ旅をするたびにそのことを痛感する。

今年一月、長崎市に出かけ長崎歴史文化協会の越中哲也先生を訪ねた際、機関誌「ながさきの空」の原稿依頼を受けた。主要テーマは、「天草切支丹館の紹介について」と言うことであった。

それにふれる前に、長崎と天草の歴史文化、観光の背景について記してみたい。

長崎を中心とした五島、平戸、大村、島原および天草までの西九州地域は、古くから中国文化をはじめ東洋文化の影響を受け、近世初期は南蛮・唐・紅毛文化の交流が盛んであった。そんな長崎、天草地域は、十六世紀後半から密接な関係を深めながら、共通の宗教文化を発展させてきた。キリシタン文化がそれである。

長崎、天草に置かれたキリスト教の最高学府・コレジオ（学林）での宣教師養成、金属版印刷による数多い出版物がそのことを物語っている。



天草切支丹館

そのキリスト教を伝えたのは、ご存じポルトガルの宣教師ルイス・デ・アルメイダである。天草は一五六六年、長崎では翌六七年から布教が行われ、以来キリシタン文化が華開いた。これを記念し、本渡市の殉教公園にはアルメイダのレリーフが、長崎の春徳寺前には布教記念碑がそれぞれ建立されている。医療にも貢献したアルメイダは一五八三年十月、天草の河内浦で没した。

その後の禁教令下では、隠れキリシタ

どの南蛮文化、隠れキリシタン、代官行政、天草島原の乱、の四つのコーナーに分類し、四百年来のキリシタン関係資料が展示してある。

なかでも、天草島原の乱でのキリシタン一揆勢のシンボルだった「天草四郎陣中旗」は、国の重文であるとともに世界三大聖旗の一つといわれる極めて貴重な文化財である。陣中旗はシルクの菊花紋織の倫子製の指し物で、サイズは百八センチ四方。中央に大聖杯、上にラテンクルス、左右に合掌している天使が描かれ、点々と残る血痕や矢弾の跡は、信仰の深さ、戦さの激しさがしのばれる。

この陣中旗は、キリシタン一揆勢が立てこもる島原南有馬の原城に攻め入った鍋島藩の鍋島大膳が戦利品として分捕って以来、鍋島藩で受け継がれ、のちに転々としたあげく、昭和五十三年に所有者から天草切支丹館に寄託、平成七年六月、松本高光翁より寄贈を受けた。図柄は、天草島原の乱でただひとり生き残った、わが国初期の洋画家・山田右衛門作（島原口之津）が描いた作品だと伝えられている。旗の図柄はキリストをシンボル化した聖晚餐の図である。

このほか館内には、「四郎乱物語」など本渡市指定文化財六点、隠し十字仏、逆さ観音、踏み絵、天草四郎像など、およそ四百点の資料が展示してある。

昭和四十一年九月には三笠宮殿下ご夫妻、翌四十二年に秩父宮殿下、そして四十三年四月には皇太子殿下ご夫妻（現両陛下）がご来館され話題となり、人気を呼んだ。

館の前庭には、北原白秋の詩碑や天草四郎銅像、中村汀女句碑、大聖杯、陣中旗の寄贈者・松本翁の顕彰碑がある。さらに、近くの二の丸跡には乱の殉教者を祀る千人塚と、キリシタン墓地がある。墓地内には、アルメイダ像、天草で最初に殉教したアダム荒川の記念碑が建ち、訪れる人の散策コースとなっている。

ここ数年の年間入館者は、六万人台でほぼ横ばい。隠れキリシタンの里、風光に富んだ天草を求めて訪れる観光客があとを断たず、キリシタン巡礼の旅と銘打った韓国からのツアーも増える傾向にある。

ンによるキリシタン崩れが浦上、大村、天草であいついでいた事は衆知のとおりである。

時代くだって文政四年（一八二二）、時の領主は天草の貧困と人口過剰を解消するため長崎への出かせぎを奨励した。当時の長崎は鎖国のもとで日本唯一の貿易港であり、出かせぎを受け入れる元氣な街だったため、天草の人たちは長崎へ仕事を求めて海を渡った。実は私の祖母も明治になって長崎へ奉公に出かけたひとりだった。

天草は明治二年に長崎県の管轄となったが、同四年には廃藩置県で八代県の管轄となり、その後、白川県を経て熊本県となった。

関東方面など他所の人のなかには、いまま天草は長崎県とみている人が少なくない。荅北町名物の蛇おどりやコツコデシヨ、ペーロン大会は、中国から長崎を経て天草に伝わった伝統行事で知られている。

一方、天草から長崎には、江戸末期から明治にかけて洋風建築、石造の文化が伝えられた。日本での洋風建築の先駆者といわれた小山秀之進（五和町御領大島出身）は文久元年、フランス・グルーム邸を手がけたほかグラバー邸、リンガー兄弟邸、オルト邸、それに国宝指定の大浦天主堂など、今に遺るモダンな洋風建築の設計、工事を手がけ完成させている。

ここ本渡市の天草切支丹館には、小山秀之進が使用した「方針」などの遺品や、本人の顔写真が展示してある。人的交流も盛んだった。元長崎市長の諸谷義武氏は荅北町富岡出身だった。

さて、ここから天草切支丹館についてご紹介したい。本渡市内を一望できる殉教公園の一角（本渡城本丸跡）に昭和四十一年八月一日、建設オープンして今年で三十九年。館内には国指定の重要文化財「天草四郎陣中旗」をはじめ、わが国初の金属版印刷である天草本「平家物語」な

風信

○五月一日、目に若葉の候。事務所の窓より風頭（かざがしら）の楠若葉が一番美しい季節で、私は其の若葉に誘われ、肥前古賀の駅より上床公園をすぎ、現川（うつゝがわ）の峠をこえ街に帰った。「わけ入っても分け入っても青い山」（山頭火）であった。途中上床自治会の田口末吉会長より色々とお話をきき、おいしい黒豆入りの「おにぎり」もごちそうになった。

○若葉の中を歩きながら芭蕉の句「若葉して おん目のしづく ぬぐはばや」を不図おもい出し、先年、鑑真和尚の遺跡を訪ねて中国揚州の古刹大明寺に出かけた事が頭に浮んだ。その時も五月若葉の候であり、寺の山門を下り瘦西湖に浮かぶ画舫に乗り、心ゆくまで新柳色を楽しませて戴いた。

○故林源吉先生の古い日記をみていたら、昭和十六年五月十六日の條に「始めて長崎の有志者相図り丸山花月の庭園に端唄春雨の記念碑建立」とあり、更に、この「春雨」の作者が鍋島藩小城の藩士柴田花守であることが判明した次第も記してあった。戦後その「春雨まつり」は再出発し、私も出席させられていたが、現在はどうなっているであろうか。

○昨年末、出島史跡保存復元工事が発掘資料や古文書を参考に急ピッチで進められている。今回の中心的建造物は出島最大の建造物であった「カピタン屋敷」の復元である。先日、展示資料の事もあって工事現場を見せて戴いたが、建物の正面は約三〇メートル、背後には板敷の大きなベランダがあり、天井も高かった。完成時の壮観さが思われる。

○二十六聖人記念館の結城神父様より「有馬のセミナーヨ関係資料集」を戴いた。有馬のセミナーヨの創立は一五八〇年、そのセミナーヨが廃止されたのは一六一二年である。其の間の歴史文化の流れは、長崎学を学ぶ人には、是非、知識として学んでおかねばならぬ参考事項であると考え読ませて戴いた。（北有馬町役場発行、二〇〇〇円）

